

同志社女子大学生生活科学 Vol. 49, 18~27 (2015)

〈原著論文〉

女子大学生における否定的出来事に関する記憶表象

——解離性傾向との関連——

The Memory Representations of the Most Negative Life Event in Female Undergraduates :
The relationships with dissociative tendency

諸井 克英 大東 奈央*
(Katsuhide MOROI) (Nao DAITO)

今井 友紀* 山本 真央*
(Yuki IMAI) (Mao YAMAMOTO)

Abstract : The present study examined the relationships among dissociation experience, adult children tendency, the memory representations of the most negative life event, and the psychological impact of the event. The Dissociative Experience Scale (Tanabe & Ogawa, 1992), the Adult Children Scale (Moroi, 2007), the Psychological Impact of the Life Event Questionnaire (Moroi *et al.*, 2013), and the Memory Representation Scale (Otabe, 2011) were administered to female undergraduates ($N=241$). By factor analysis (Maximum likelihood estimation with promax rotations) for the Memory Representation Scale, three factors were extracted; Negativity of verbally accessible memories, situationally accessible memories, and degree of verbalization. According to a series of regression analyses (stepwise method) and the structural equation model analyses (Amos 22.0.0), the psychological impact of the most negative life event was significantly influenced by negativity of verbally accessible memories and situationally accessible memories. The relationship between dissociative tendency and the psychological impact of the life event was mediated by situationally accessible memories. The significance of this research was discussed from the point of view of clinical treatment.

Key words : dissociation, adult children, memory representation, life event.

I. 問題

諸井・木村・長井・堺・西田(2013)は、家族機能不全の再生産過程に関する構図(諸井ら(2013)の図-1参照)に基づき、小学5・6年頃の親子間における肯定的経験が青年期の親準備性傾向の育みを促進する一方で、否定的経験が有害な効果をおよぼすことを見出し

た。諸井らの構図は、わが国の重要な社会的問題の1つである児童虐待現象の広がり背景として立案された。本研究では、このうちの否定的経験に注目し、親子関係に限定せず日常生活で生じた否定的経験がどのように処理されているかに関する心理的機制の一端を実証的に明らかにする。この心理的機制を明らかにすることによって、児童虐待などの当事者によって抱かれる否定的経験の心理学的影響に関する臨床的克服のために知見を提供することができよう。

きわめて強い否定的経験は、心的外傷とも呼ばれる。

同志社女子大学生生活科学部

*同志社女子大学生生活科学部 2012年度卒業生

この用語は trauma (トラウマ) の訳語であり、もともと身体の怪我を意味していたが、19世紀末ごろから「衝撃的な出来事が精神あるいは心に及ぼす影響」を指すようになった(森, 2005)。岡野(2009)によれば、心的外傷とは、「心がある強い衝撃を受けて、その働きに半ば不可逆的な変化を被ってしまうこと」である。つまり、否定的経験とその後の種々の心理学的影響をも含めた概念である。心的外傷という概念は、もともと古典的精神分析に起源をもつが(森, 2005 参照)、今では外傷後ストレス障害(posttraumatic stress disorder)として、先述した児童虐待などの治療などでも重要な扱いをされている。例えば、Herman(1992)は、古典的精神分析の中で行われた女性に特異とされたヒステリー障害の概念を心的外傷という概念に置き換えることによって、外傷後ストレス障害(posttraumatic stress disorder)の理論化に取り組んだ。彼女は、とくに女性解放運動の視点から戦争経験、レイプや、家庭内での種々の経験など幅広くこの障害を体系化した。Hermanによれば、外傷後ストレス障害は、次の3症状に大別できる。①過覚醒(hyperarousal)〈長期にわたる危険に対する備え〉、②侵入(intrusion)〈心的外傷を受けた刹那の消せない刻印〉、③狭窄(constriction)〈屈服による無感覚反応〉。また、Hermanは、心的外傷の症状として、「口に出せない秘密が存在することに注意を向けさせると同時に注意をそれから外させるという二重の働き」を指摘している。つまり、この心的外傷の問題は、一般的には人間の記憶機制の問題でもあるのだ。

小田部(小田部・加藤・丸野, 2009)は、「心の傷」が①ストレッサー、②ストレッサー、および③メカニズムの3側面から心理学的に捉えられていることを指摘した上で、以下のように定義した。「自己が身体的あるいは心理的に傷つけられるようなストレスフルな体験が、記憶に内在化されたものであり、その個人の後の認知や感情や行動をネガティブな方向に歪める機能を持つ一種のスキーマ」。小田部は、この定義に沿って、「生命の脅威を体験するような非常にストレスフルな体験」である「トラウマ」と、「日常の対人関係の中でより頻繁に体験している心の傷」である「日常型心の傷」の区別を提案した。その上で、後者に焦点をあて、記憶機制からのアプローチを試みた。小田部によると、心の傷に関する保持は、状況依存的記憶(「出来事の中で体験した生理的、感覚的、筋肉運動的な経験に関する詳細な情報」と言語的記憶(「体験したときの状況や内容について意識的に言語化・意味づけした情報」という2側面をもち、

後者はさらに言語化の程度(「体験を意識的に言語化して説明できる程度」と言語的記憶のネガティブ度(「体験がネガティブに意味づけられている程度」)に分離できると考えた。

ところで、心的外傷と関連した障害として解離性障害(dissociative disorders)をあげることができる。解離性障害とは、心理機能の全領域での正常な統合における破綻であり、精神疾患の診断マニュアルによれば(American Psychiatric Association, 2013)、①主観的体験の連続性喪失を伴った、意識と行動へ意図せずに生じる侵入(同一性の断片化、離人感、現実感といった“陽性の”解離症状)、②通常は容易であるはずの情報の利用や精神機能の制御不能(健忘のような“陰性の”解離症状)。例えば、福井・野村・小澤・田辺(2010)は、男女大学生を対象に解離性傾向が強い者が過去に様々なタイプの否定的経験に遭遇していることを見出した。

以上に述べた諸知見に基づき、本研究では、日常生活の中での否定的出来事に注目して、次のことを明らかにするための質問紙調査を実施する。①個人的傾向としての解離性傾向が日常生活で遭遇する否定的経験の記憶保持の仕方(記憶表象)にどのような影響を与えるか、②解離性傾向や遭遇出来事の記憶表象が当該出来事の心理的インパクトにどのように影響するか。つまり、日常的に経験した否定的出来事を対象として、「解離性傾向⇒記憶表象⇒出来事のインパクト」の因果的影響を検討した。なお、先行研究(諸井ら, 2013)で扱ったアダルト・チルドレン傾向の影響も解離性傾向に加えて調べた。

II. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、質問紙調査を実施した(2012年5月10日・21日)。回答者には匿名性を保証し、質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き、後述の尺度に完全回答した女子学生241名を分析対象とした(1回生151名、2回生66名、3回生18名、4回生6名)。回答者の平均年齢は18.73歳($SD = 0.91$, 18~22歳)であった。

質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に加え、①アダルト・チルドレン傾向尺度、②解離性傾向尺度、③想起出来事に関する設問群、および④記憶表象尺度から構成されている。

1. アダルト・チルドレン尺度

本研究では、諸井 (2007) が作成した尺度を用いて回答者のアダルト・チルドレン傾向を測定した。諸井 (2007) は、Woitz (1983) が整理した「アダルト・チルドレン (以下、AC と略記)」の特徴に基づきアダルト・チルドレン傾向尺度 (18 項目) を作成した。この尺度は、諸井 (2007) の研究では主成分分析により 3 側面 (自信の欠如, 統制感の欠如, 対人的不調和) が抽出されたが、後の研究では (諸井ら, 2013), 因子分析により 2 側面 (対人的不調和, 過剰な自責感) が認められた。

18 項目それぞれについて、「この 6 ヶ月間」のまわりとの人間関係や自分の気持ちにあてはまるかどうかを、4 点尺度で評定させた (「4. かなりあてはまる」, 「3. どちらかといえばあてはまる」, 「2. どちらかといえばあてはまらない」, 「1. ほとんどあてはまらない」)。

2. 解離性傾向尺度

回答者の日常生活における解離性体験の程度を測定するために、田辺・小川 (1992) が作成した解離性体験尺度を利用した (表 1-b, 付表 1 参照)。田辺・小川は Bernsein & Putnam (1986) の Dissociative Experiences Scale (DES と略記) の日本語版作成を試みた。DES は、解離性体験の様々な症状 (記憶の脱落, 現実感喪失体験, 離人体験, 同一性の変容感, 苦痛の無視, 没頭など) に関する項目から構成される (田辺・小川による日本語版 28 項目; Spearman-Brown の折半信頼性係数 .64, $N = 442$; 再検査信頼性係数 (約 1 ヶ月) .95, $N = 35$)。

回答者にこの 6 ヶ月間の自分自身の生活を振り返らせたいので、項目に表されている気持ちや体験がどのくらい起きたかを 4 点尺度で回答させた (「4. ひんぱんに起きた」, 「3. どちらかといえば起きた」, 「2. どちらかといえば起きなかった」, 「1. まったく起きなかった」)。

3. 想起出来事に関する設問群

回答者に今までに経験した出来事のうち、「最も嫌だった出来事」を想起させ、具体的に記述させた。その上で、①まわりの人々が経験している出来事との比較 (「4. かなり嫌だった」~「1. ほとんど嫌ではなかった」), ②今までに経験した出来事との比較 (「4. かなり嫌だった」~「1. ほとんど嫌ではなかった」), ③経験した出来事の記憶 (「4. かなりはっきりと覚えている」~「1. ほとんど覚えていない」), それぞれについて回答を求めた。

4. 記憶表象尺度

具体的に同定した「最も嫌だった出来事」が回答者の

記憶機制によってどのように保持されているかを測定した。このために、小田部 (2011) が開発した『「日常型心の傷」の記憶表象尺度』を利用した。この尺度によって、①状況依存的記憶 (「出来事の中で体験した生理的, 感覚的, 筋肉運動的な経験に関する詳細な情報」), ②言語化の程度 (「体験を意識的に言語化して説明できる程度」), ③言語的記憶のネガティブ度 (「体験がネガティブに意味づけられている程度」) が測定できる。小田部は、インタビューや自由記述調査によってこれら 3 側面を表す項目 (各 5 項目) を作成し、男女大学生を対象に実施したところ、因子分析により仮定と対応した 3 因子解が抽出された (各側面に対応した 13 項目)。

本研究では、回答者が同定した「最も嫌だった出来事」について、13 項目 (表 1-d, 付表 1 参照) それぞれがどの程度あてはまるかを 4 点尺度で回答させた (「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

なお、評定順の効果を相殺するために、(1), (2) および (4) では評定用紙を頁単位 (それぞれ, 2 頁, 3 頁, 2 頁) でランダムに並び替えた。

Ⅲ. 結果

各尺度の検討

1. 分析の手続き

①アダルト・チルドレン尺度, 解離性傾向尺度, および記憶表象尺度: AC 尺度および解離性傾向尺度では、回答者が健常者であることを前提にすると、概念的に否定的方向への回答の偏りがそれぞれ生じるはずなので、標準偏差値のチェックのみ ($SD > .60$) 行った。記憶表象尺度では、項目平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD > .60$) のチェックをし、不適切な項目を除去した。その上で、それぞれで残りの項目を対象に因子分析 (最尤法, プロマックス回転 ($k=3$)) を実施した。その際、初期共通推定値の基準 ($> .25$) を設定し、基準に満たない項目を予め削除した。

以上のようにして、因子分析 (最尤法, プロマックス回転 ($k=3$)) で、初期因子固有値 ≥ 1.00 を充たす解をすべて求め、適切な解を探索した。その際、①特定因子への負荷量が十分に大きく (絶対値 $\geq .40$), ②他因子への負荷が小さい (絶対値 $< .40$) という基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ .40 以上の負荷量を示すように、項目を削除しながら、①と②の基準を充たすまで分析を反復した。明確な因子パターンが得られた解を採用した。

女子大学生における否定的出来事の実験に関する記憶表象

因子分析の結果に基づいて、各因子への負荷量を基準（絶対値 $\geq .40$ ）に項目を選別し、因子概念に一致した方向に得点が高くなるように得点調整をした上で下位尺度項目を構成した。下位尺度ごとに、1次元性の確認を行い（項目-全体相関分析、 α 係数）、構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

②想起出来事に関する評定：想起出来事に関する3項目のうち2項目については、「最も嫌だった出来事」に関する評定であることを加味すると当然否定的方向への偏りが考えられるので項目水準の基準は設けなかった。主成分分析、項目-全体相関分析、および α 係数値により単次元性を確認し、項目の平均値を尺度得点とした。

2. アダルト・チルドレン傾向尺度

標準偏差値の基準で1項目（ $SD < .60$; ac_b_4）、初期共通性基準で7項目（ac_a_3, ac_a_7, ac_a_8, ac_b_2, ac_b_6, ac_b_7, ac_b_9）が不適切であったので、残りの10項目を対象に因子分析を実施し、3因子解までを検討した。明確な因子パターンが現れた2因子解を採用した（表1-a）。第I因子は、自責感や自己統制欠如感を表す項目の負荷が高く、「I. 自我混乱感」と命名した。第II因子の負荷が高い項目は対人関係不全に関わるので、「II. 対人的不調和」とした。

3. 解離性傾向尺度

標準偏差値の基準で3項目（ $SD < .60$; disso_a_5,

disso_b_2, adisso_c_9）、初期共通性推定値基準で3項目（disso_a_6, disso_b_1, disso_c_2）が不適切であったので、残りの22項目を対象に因子分析を実施し、2~5因子解までを検討した。明確な因子パターンを抽出できなかったため、標準偏差値基準で不適である3項目を除く25項目を対象として単次元性の検討を試みた（表1-b）。主成分分析での未回転第I主成分説明率が若干低かったが、 α 係数値のほうは十分であった。22項目の平均値を解離性傾向得点とした。回答者が健常サンプルであることと対応して、平均値は尺度中性点（2.5）を大幅に下回った（対応のあるt検定： $t_{(240)} = -24.12, p = .001$ ）。

4. 想起出来事に関する評定

同定した出来事に対する3評定の単次元性の検討を行った（表1-c）。これら3項目が単次元性を構成すると判断できたので、3項目の平均値を出来事インパクト得点とした。平均値は中性点を大きく上回り（ $t_{(240)} = 27.31, p = .001$ ）、想起教示の妥当性を示した。

5. 記憶表象尺度

項目水準ではすべての項目が適切だったので（ $SD > .60$; 初期共通性推定値 $> .25$ ）、13項目すべてを対象に因子分析を行った。算出可能な2~4因子解を検討したが、小田部（2011）と一致して3因子解で明確な因子パターンが認められた（表1-d）。小田部に従って、それぞれ「I. 言語的

表1-a アダルト・チルドレン傾向尺度に関する因子分析（主因子法、プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果
一回転後の負荷量

	I	II
[自我混乱感] $\alpha = .78, r = .47 \sim .65, m = 2.57, SD = 0.62$		
ac_b_3 私は、自己嫌悪に陥りやすい。	.80	-.03
ac_a_5 私は、厳しく自分を責めることがある。	.60	.00
ac_a_1 私は、何が普通で、何が異常であるかを、ついつい考えがちになる。	.56	.00
ac_b_8 私は、混乱しやすい。	.52	.09
ac_b_5 私は、自分で自分がコントロールできなくなる。	.52	.19
ac_a_2 私は、自分ではどうすることもできない変化に対して過剰に反応する。	.52	.01
[対人的不調和] $\alpha = .71, r = .53 \sim .54, m = 1.88, SD = 0.65$		
ac_b_1 私は、自分が他人と一緒にいて違和感を抱く。	-.06	.70
ac_a_9 私は、まわりの人と親しい関係を維持しにくい。	.04	.67
ac_a_6 私は、あらゆる状況において純粋に楽しむことがなかなかできない。	.13	.60
[因子間相関]	I	.56

N=241

初期因子固有値 > 1.20 ; 初期説明率 53.51%

α : Cronbach の信頼性係数

r: 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値（すべて $p < .001$ ）

m: 平均値; SD: 標準偏差値

表 1-b 解離性体験尺度に関する単一次元性の検討

	(a)	(b)
disso_a_1	.54	.48
disso_a_2	.51	.47
disso_a_3	.53	.47
disso_a_7	.66	.59
disso_a_8	.53	.47
disso_a_9	.61	.55
disso_b_3	.62	.55
disso_b_4	.65	.57
disso_b_5	.54	.48
disso_b_6	.60	.54
disso_b_7	.70	.64
disso_b_8	.49	.43
disso_b_9	.68	.62
disso_b_10	.44	.38
disso_c_1	.49	.44
disso_c_2	.42	.37
disso_c_3	.56	.50
disso_c_4	.43	.38
disso_c_5	.61	.55
disso_c_6	.60	.55
disso_c_7	.50	.44
disso_c_8	.59	.52
$m = 1.78, SD = 0.47$ 第 I 主成分説明率 31.84%		$\alpha = .89$

N = 241

(a) 主成分分析における未回転第 I 主成分負荷量

(b) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値 (すべて $p < .001$)

m : 平均値 ; SD : 標準偏差値

表 1-c 「最も嫌だった出来事」に関する評定の単一次元性の検討

	(a)	(b)
他者比較：あなたのまわりの人々が経験している「出来事」との比較	.80	.49
自己比較：あなたが今までに経験した「出来事」との比較	.82	.52
記憶の鮮明さ：現在のどのくらい覚えているか	.69	.39
$m = 3.44, SD = 0.53$ 第 I 主成分説明率 59.85%		$\alpha = .65$

N = 241

(a) 主成分分析における未回転第 I 主成分負荷量

(b) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値 (すべて $p < .001$)

m : 平均値 ; SD : 標準偏差値

記憶のネガティブ度」, 「Ⅱ. 状況依存的記憶」, および「Ⅲ. 言語化の程度」と名づけた。

6. 下位尺度得点

因子分析によって構成された下位尺度ごとに信頼性分析を行ったが, いずれも十分な結果であった (表 1-a, 1-d)。下位尺度間で平均値を比較すると, t 検定により「自我混乱感 > 対人的不調和」($t_{(240)} = 16.46, p = .001$),

反復測定分散分析により「言語化の程度 > 状況依存的記憶 > 言語的記憶のネガティブ度」の有意な傾向が認められた ($F_{(1,92/460,76)} = 19.88, p = .001$, Bonferroni の法)。「自我混乱感」は中性点と異ならなかったが ($t_{(240)} = 1.75, ns$)。「対人的不調和」は回答者が健康なサンプルであることと対応して中性点を有意に下回った ($t_{(240)} = -14.68, p = .001$)。しかし, 「言語的記憶のネガティブ度」は中

女子大学生における否定的出来事に関する記憶表象

表 1-d 「日常型心の傷」の記憶表象尺度に関する因子分析（主因子法，プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果—因子負荷量—

		*	I	II	III
〔Ⅰ. 言語的記憶のネガティブ度〕 $\alpha = .80, r = .50 \sim .67, m = 2.29, SD = 0.73$					
neg_b_5	その「出来事」を経験したことで、自分の人生が悪い方向に行ってしまったと思う。	ネ	.73	.05	-.07
neg_a_4	その「出来事」を経験したことで、自分に対して自信を持てなくなった。	ネ	.71	-.16	.01
neg_a_5	その「出来事」を経験したことは、嫌な思い出として、ずっと心に引っかかっている。	ネ	.67	.15	-.03
neg_b_4	その「出来事」を経験したことで、人を信用できなくなった。	ネ	.59	.02	.01
neg_a_7	その「出来事」を経験したことは、これから先も、嫌な思い出として忘れることができない。	ネ	.53	.19	.00
〔Ⅱ. 状況依存的記憶〕 $\alpha = .85, r = .61 \sim .75, m = 2.45, SD = 0.88$					
neg_b_2	ふとしたきっかけで、その「出来事」を経験したときに体で感じた感覚や音や声がよみがえる。	状	-.15	.96	-.02
neg_b_1	ふとしたきっかけで、その「出来事」を経験したときに見たものや聞いたこと、体で感じたことなどが鮮明に思い出される。	状	.04	.74	.12
neg_a_1	ふとしたきっかけで、その「出来事」を経験した当時の状況や風景などのイメージがよみがえる。	状	.17	.66	-.01
neg_b_6	その「出来事」の経験に関係するものを見たり聞いたりすると、まるでその時に戻ったような体や心の状態になる。	状	.35	.47	-.02
〔Ⅲ. 言語化の程度〕 $\alpha = .74, r = .35 \sim .73, m = 2.64, SD = 0.75$					
neg_a_6	その「出来事」を経験したときに、自分やまわりの人がどのように振るまったかを順序立てて話すことができる。	言	.04	-.04	.96
neg_a_2	その「出来事」を経験したときに、自分やまわりの人がどんな言葉を使ったかを順序立てて話すことができる。	言	.06	.06	.78
neg_b_3	その「出来事」を経験したときの自分の状況と気持ちについて、自分なりに整理できている。	言	-.15	.04	.41
〔因子間相関〕			I ****	.51	.31
			II	****	.37

$N = 241$

初期固有値 > 1.29 ；初期説明率 64.51%

* 先行研究（小田部，2011）との対応：Ⅰ. 状況依存的記憶，Ⅱ. 言語的記憶のネガティブ度，Ⅲ. 言語化の程度

α ：Cronbach の信頼性係数

r ：当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値（すべて $p < .001$ ）

m ：平均値； SD ：標準偏差値

性点よりも有意に低く ($t_{(240)} = -4.53, p = .001$)、「言語化の程度」は中性点よりも有意に高かった ($t_{(240)} = 2.98, p = .003$)；「状況依存的記憶」 $t_{(240)} = -0.82, ns$ 。これは、同定した出来事が必ずしも現在の心理的状态に決定的な影響をおよぼしていない可能性があることを示唆する。**出来事インパクトの規定因**

重回帰分析と共分散構造分析を用いて、「最も嫌だった出来事」に関する嫌悪感情（出来事インパクト）が個人的傾性としての AC 傾向と解離性傾向や、同定した出来事の記憶保持の仕方（記憶表象）とどのような関係にあるかを検討した。

1. 重回帰分析

「解離性傾向⇒AC 傾向⇒記憶表象⇒出来事インパクト」という因果的影響を仮定して、3 通りの重回帰分析（ステップワイズ法；投入基準 $p < .05, p > .10$ ）を行った（表 2；変数相互のピアソン相関値を付表 1 に示

す）。①分析Ⅰ：従属変数〈出来事インパクト〉、説明変数〈解離性傾向、AC 傾向 2 得点、記憶表象 3 得点〉、②分析Ⅱ：従属変数〈記憶表象 3 得点〉、説明変数〈解離性傾向、AC 傾向 2 得点〉、③分析Ⅲ：従属変数〈AC 傾向 2 得点〉、説明変数〈解離性傾向〉。検出された有意な影響関係は以下の通りであった。

分析Ⅰによると、出来事インパクトは、出来事の記憶表象のうち「状況依存的記憶」と「言語的記憶のネガティブ度」が高いほど、AC 傾向の「対人的不調和」が高いほど、強く感じられていた。分析Ⅱでは、次の傾向が得られた。「解離性傾向」は、記憶表象の「言語的記憶のネガティブ度」と「状況依存的記憶」をとともに高めた。AC 傾向の「対人的不調和」は「言語的記憶のネガティブ度」、「自我混乱感」は「状況依存的記憶」をそれぞれ活性化した。なお、「言語化の程度」の有意な規定因は現れなかった。

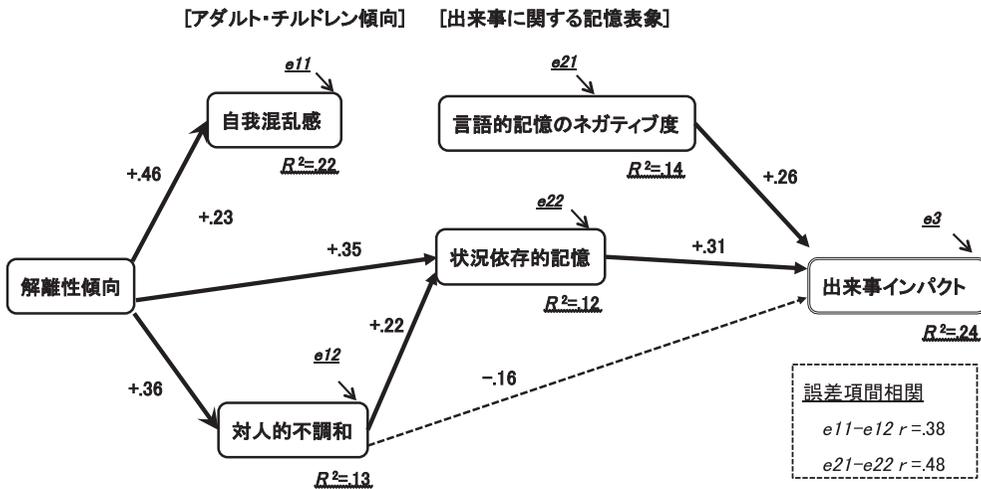
表2 出来事インパクトの規定因に関する重回帰分析 (ステップワイズ法) の結果

[分析 I]	[分析 II]	[分析 III]
説明変数: 解離性傾向 自我混乱感 対人的不調和 言語的記憶のネガティブ度 状況依存的記憶 言語化の程度	説明変数: 解離性傾向 自我混乱感 対人的不調和	説明変数: 解離性傾向
従属変数: 出来事インパクト β	従属変数: 言語的記憶のネガティブ度 β	従属変数: 自我混乱感 β
状況依存的記憶 .31 a	対人的不調和 .27 a	解離性傾向 .47 a
言語的記憶のネガティブ度 .26 a	解離性傾向 .21 a	$R^2 = .22$ a
対人的不調和 -.16 b	$R^2 = .16$ a	従属変数: 対人的不調和 β
$R^2 = .23$ a	従属変数: 状況依存的記憶 β	解離性傾向 .36 a
	解離性傾向 .28 a	$R^2 = .13$ a
	自我混乱感 .15 c	
	$R^2 = .14$ a	
	従属変数: 言語化の程度 β	
	有意な規定因なし	

N = 241

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

ステップワイズ法: 投入基準 $p < .01$, 除去基準 $p > .10$



e11 ~ e3: 誤差項 矢印: 標準化パス係数[* $p < .05$; 無印すべて $p < .001$]

適合度: $\chi^2(6) = 7.85, p = .165, GFI = .99, AGFI = .96, RMSEA = .05$

図1 出来事インパクトの規定因-観測変数の構造方程式 (Amos 22.0.0, 最尤推定法) による因果分析 (N = 241) -

2. 共分散構造分析

Amos 22.0.0 を利用して出来事インパクトの規定因に関する因果分析を行った。前述した重回帰分析で認められた関係に基づきモデルを作成し、観測変数の構造方程式 (最尤推定法; 豊田, 1998) の分析を試みた。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善し、最終モデルを得た (図1)。なお、この最終モデル

では、重回帰分析分析では有意な影響が検出された「自我混乱感⇒状況依存的記憶」の影響関係を仮定する必要がなかった。

補足分析-出来事の説明量と諸測度との関係

前述したように、本研究では、回答者に「最も嫌だった出来事」を同定させ、具体的な説明を求めた。そこで記述文章をバイト数 (日本語の1語は2バイト) に換算

表3 「最も嫌だった出来事」の具体的説明文字数(バイト数)と各測定得点との関係—ピアソン相関値—

	<i>r</i>
解離性傾向	.02
[アダルト・チルドレン傾向]	
自我混乱感	.01
対人的不調和	-.06
[記憶表象]	
言語的記憶のネガティブ度	-.07
状況依存的記憶	-.10
言語化の程度	.07
出来事インパクト	-.05

N = 241

r: すべて ns.

バイト数の対数化 = \log (具体的説明文字バイト数)

し、諸測定との間のピアソン相関値を求めた(表3)。なお、この変数を対数化したが(\log (バイト数))、この変換によって正規分布といえる変数が得られた(Kolmogorov-Smirnov 検定における Lilliefors の修正値が $.144 < p = .001 >$ から $.037 < p = .200 >$ に低下)。しかしながら、いずれの測定との関係についても何の相関傾向も認めることができなかった。

IV. 考察

本研究の目的は、家族機能不全の再生産過程に関する研究(諸井ら, 2013)を踏まえ、日常生活で生じた否定的経験の心理的処理に関する機制の一端を実証的に明らかにすることであった。このために、女子大学生を対象として以下の測定を含む質問紙調査を実施した。①個人的傾性としての解離性傾向と AC 傾向の測定、②回答者が今までに経験した出来事のうち「最も嫌だった出来事」の想起、③その「出来事」の心理的インパクトと、その「出来事」に関する記憶表象の測定。

測定尺度の統計的妥当性を検討した上で、「解離性傾向⇒AC 傾向⇒記憶表象⇒出来事インパクト」という因果的影響を仮定して、重回帰分析や共分散分析を行った。その結果、「解離性傾向→対人的不調和 (AC 傾向)→状況依存的記憶 (記憶表象)→出来事インパクト」や「言語的記憶のネガティブ度 (記憶表象)→出来事インパクト」という影響関係が浮き彫りになった。興味深いことに、回答者の個人的傾性としての解離性傾向や AC 傾向は、「最も嫌な出来事」の不快さに直接影響するこ

とはなく、出来事経験に付随した身体的記憶(状況依存的記憶)が媒介していた。さらに、当該出来事を意識的にどのくらい言語化できるか(言語化の程度)は、本研究では出来事の不快さと無関係であった。小田部(2011)の研究でも、言語化の程度(ただし、小田部では「他者の言動によって最も心が傷ついた体験」を想起)のみ、PTSD 症状との間に有意な関係が見られなかった。

本研究でも因子の妥当性が確認された記憶表象の3次元のうち、状況依存的記憶と言語的記憶のネガティブ度は記憶の感覚的、情動的側面に対応しており、言語化の程度は言語という相対的に抽象化された側面を指している。したがって、小田部(2011)や本研究の結果は、カウンセリングにとって示唆的である。遭遇した出来事に関する言語化は実は出来事インパクトの緩和にとってあまり重要ではなく、当該出来事に付随した感覚や情動の除去が優先される必要がある。

ところで、回答者が同定した「最も嫌だった出来事」に関する記述文章量と諸測定との関係を検討したが、有意な関係は認められなかった。先述した Herman(1992)の指摘に従えば、心的外傷の場合には当該出来事に対する注意と注意の回避という相反する処理過程が存在する。したがって、想起した「最も嫌な出来事」の具体的説明を求められた際に、回答者には「最も嫌な出来事」であるがゆえに当該出来事の詳細に関する回顧過程と、逆に想起を回避しようとする過程が同時に喚起され、結果として記述文書量と諸測定との関連が消失すると思われる。父親や母親との過去の肯定的経験および否定的経験を扱った諸井ら(2013)の研究では、父親との肯定的経験のみ、経験の記述量と出来事インパクトとの間に有意な正の関係があった。これは、Herman の二重過程の考えと一致するが、母親の場合には肯定的経験と否定的経験のいずれも有意な関係が得られなかったことは説明できない。いずれにせよ、出来事の記述の心理学的意味について検討する必要がある。

本研究では、回答者が想起した出来事の種類に関する効果の検討は検討しなかった。条件分けすると種々の統計に耐える対象数が確保されなかったためであるが、想起出来事の効果についても緻密に探索すべきである。

〈付記〉

(1) 本研究は、大東奈央・今井友紀・山本真央(同志社女子大学・生活科学部・人間生活学専攻 2012 年度卒業)が第1著者の下で卒業研究のために収集したデータに基づいている。

(2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 22.0.0 for Windows, Amos 22.0.0 を利用した。

V. 引用文献

American Psychiatric Association 2013 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. American Psychiatric Publishing. 高橋三郎・大野裕 (監訳) 『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』2014 医学書院

Bernsein, E. M., & Putnam, F. W. 1986 Development, reliability, and validity of a Dissociation Scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **174**, 727-735.

福井義一・野村早也佳・小澤幸世・田辺 肇 2010 虐待的養育環境と心身の解離傾向, アレキシサイミア傾向, 心身の健康との関連 感情心理学研究, **18**(1), 25-32.

Herman, J. L. 1992 *Trauma and recovery*. Basic Books. 中井久夫 (訳) 『心的外傷と回復 (増補版)』1999 みすず書房

森 茂起 2005 『トラウマの発見』講談社

諸井克英 2007 家族機能認知とアダルト・チルドレン傾向 同志社女子大学学術研究年報, **58**, 85-92.

諸井克英・木村有花・長井佐哉香・堺かおる・西田郁美 2013 親との接触経験が親準備性傾向の形成におよぼす影響 同志社女子大学学術研究年報, **64**, 71-81.

岡野憲一郎 2009 『新外傷性精神障害—トラウマ理論を越えて—』岩崎学術出版社

小田部貴子 2011 「日常型心の傷」の記憶表象尺度の開発 パーソナリティ研究, **20**(1), 45-49.

小田部貴子・加藤和生・丸野俊一 2009 「心の傷」に関する諸研究をどのように位置づけるか—「日常型心の傷」を取り入れた新たな枠組みの提案—九州大学心理学研究, **10**, 61-80.

田辺 肇・小川俊樹 1992 質問紙による解離性体験の測定 —大学生を対象にした DES (Dissociative Experiences Scale) の検討— 筑波大学心理学研究, **14**, 171-178.

豊田秀樹 1998 『共分散構造分析入門 [入門編]—構造方程式モデリング—』朝倉書店

Woititz J. G. 1983 *Adult children of alcoholics: Expanded edition*. Health Communication, Inc. 斎藤学 (監訳) 『アダルト・チルドレン—アルコール問題 家族で育った子供たち—』1997 金剛出版 (2015年11月6日受理)

付表1 残余項目

《解離性体験尺度》	
disso_a_4	今着ている服をいつ着たのか覚えていない。
disso_a_5	買った覚えがないのに、新しい持ち物があることに気づく。
disso_a_6	見ず知らずの人に、違う名前と呼ばれたり、以前に会ったことがあると言われる。
disso_b_1	うそをついていないはずなのに、うそをついていると責められる。
disso_b_2	鏡を見てるのに、鏡の中の自分自身に気がつかない。
disso_c_9	まわりの風景をまるで世界を霧を通して見ているように感じられる。
《「日常型心の傷」の記憶表象尺度》	
neg_a_3	その「出来事」を経験したことによって、自分の性格や考え方、人前での振る舞い方などが後々どのように影響されたか、自分なりに整理できている。

女子大学生における否定的出来事に関する記憶表象

付表 2 各測度間の関係ーピアソン相関値ー

	a-1	b-1	b-2	c-1	c-2	c-3	d
解離性傾向	a-1 ****	.47 a	.36 a	.31 a	.35 a	.08	.09
[アダルト・チルドレン傾向]							
自我混乱感	b-1	****	.48 a	.32 a	.28 a	.08	.12
対人的不調和	b-2		****	.34 a	.21 a	.01	-.01
[記憶表象]							
言語的記憶のネガティブ度	c-1		****	.54 a	.25 a	.37 a	
状況依存的記憶	c-2			****	.35 a	.42 a	
言語化の程度	c-3				****	.26 a	
出来事インパクト	d						****

N = 241

a: $p < .001$